



沖繩県訪問の最終日となった昨年十二月二十七日、一宮市の中学生らは、慰霊碑「ひめゆりの塔」(糸満市)を訪れた。資料館には、太平洋戦争末期に沖繩陸軍病院に動員され、命を落とした女子生徒らの足跡をたどる展示が並ぶ。生徒たちは集合時間の間際まで、証言者の映像や資料を熱心に見つめた。

尾西第一中二年、今井柚維さんは、親から沖繩戦の話聞いたことがあり、いつかは現地を自分の目で確かめたいと思っていた。「違つ空気を感じた。悲惨さを知り、今、自分がどれだけ幸せに生きているかを感じた」と話した。

しかし、こうした現地を訪れる平和学習は、新型コロナウイルスによって大きな影響を受けている。ひめゆり平和祈念資料館によると、二〇一九年の入館者は五十二万人だったが、感染拡大後の二〇二〇年は一三・五万人、二一年は八万人まで落ち込んだ。中でも修学旅行などで訪れる学校団体数

学ぶ機会の喪失 危機感

Ⓣ コロナ禍



は、コロナ前の十分の一に激減した。

同資料館の前泊克美学芸員は「コロナ禍で学ぶ機会が失われていることに、非常にデメリットを感じている」と憂う。「修学旅行などでないと、自分たちで足を運ぶ機会は少ない。興味があっても、なくても、沖縄で何があったのかを学ぶ大事な時間。子どものときに訪れた感想は、その後の人生に影響を与える」と指

摘する。

西尾張地域でも、清須市が毎年、原爆が投下された八月六日に合わせて、希望する二十人以上の小学生を広島に派遣してきたが、二年連続で中止に。弥富市も中学二年生が広島を訪れる平和学習があるが、一昨年はできなかった。

今回の一宮市の沖繩派遣も昨年八月の予定を延期。十二月に持ち越したが、感染状況を見守りながら、直

ひめゆりの塔の前でガイドの解説を聞く生徒ら。コロナ禍で現地を訪れる平和学習は大きく減少している＝沖繩県糸満市で

一方で、コロナ禍が「あまり目を向けてこなかった身の回りの戦争記憶を、地域教材として掘り起こす機会になる」とも指摘。往來が自由になる収束後を見据え、「家庭や地域活動の中でも積極的に話題にし、平和教育の幅を広げていけば、『いつか現地を訪れてみよう』と思う子どもを育てられるのではないかと語る。(下條大樹)

＝終わり

前まで実施するかどうかを検討した。結果的に第六波が拡大する直前の時期となり、市の関係者は「ぎりぎりのタイミングだった」と口をそろえた。

生徒たちは得るものが大きかった様子。南部中二年、浅野愛佳さんは「沖繩に訪れて初めて、戦争の実感が湧いた。心の響き方が違った。努力して派遣してくれた、一宮市の皆さんにすごく感謝している」と話した。

子どもたちの戦災地訪問について、愛知教育大の竹川慎哉准教授(教育方法学)は「日本の平和教育は、広島、長崎、沖繩の戦争体験の記憶を重視してきており、今後も重要だ」と話す。